

図表 2.14 と図表 2.15 より、男女ともに『伝統的結婚観』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』の3つの尺度とそれぞれ正に相関していた。また、『結婚への期待』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚による人間的成長』の4つの尺度とそれぞれ正に相関していた。『結婚生活に対する拘束感』は、『離婚する親への否定的イメージ』と『離婚による人間的成長』の2つの尺度とそれぞれ正に相関していた。

男女での関連の仕方の違いを見ると、男子は『伝統的結婚観』が、『女性の経済的自立による離婚の増加』に正に相関していた。また、女子は『結婚生活に対する拘束感』が、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『女性の経済的自立による離婚の増加』の3つの尺度とそれぞれ正に相関していた。

以上の結果より、男女ともに、結婚するのは当たり前で生涯独身は好ましくないと考える伝統的結婚観であることや、結婚への期待や憧れが強い大学生は、自分の結婚に対する考えや価値観と大きく異なる離婚に対して、否定的な判断をする傾向が明らかになった。

つぎに、男女の違いについてみると、結婚に対して保守的で女性の幸せは結婚することにあると考える男子にとって、離婚は受入れがたいことであり、離婚増加の背景として、女性が経済力をつけて自立したことを強く感じていた。また、結婚生活に対して拘束感の強い女子は、結婚には個人の犠牲が必要と感じ、結婚に対して好ましいイメージを持っていないと同時に、離婚に対しても否定的意識が高かった。しかしその一方で、離婚増加の背景として女性の経済的自立を感じ、離婚による人間的成長を認識していた。

第Ⅱ部 離婚と結婚に対する意識調査(学生調査) 要約

【離婚に対する考え】

1. 大学生は男女ともに、離婚に対して許容的であり、否定的な意識は少ない。そして、離婚による人間的成長や人生の再出発としての意味を感じており、離婚のプラスの側面も認識していた。しかし、離婚すると苦勞するので、自分自身は避けたいと思っていた。つまり、離婚に対して否定的な意識や偏見は少ないが、自分としては回避したいと考えていた。
2. 男子は女子に比べると、離婚に対する抵抗感、嫌悪感が強く、離婚は避けたいし、離婚が周囲に知られると世間体が悪いと考えていた。一方、女子は男子に比べると、離婚に対して寛容で、状況によってはやむをえないと認識しているが、離婚すると女性の方が男性よりも苦勞すると強く感じている。

【離婚する原因に対する考え】

1. 大多数の学生が、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」という意見には反対していたが、その他の意見「安易な気持ちで結婚する人が、離婚する」、「性格的に問題がある人が、離婚する」などについては、賛成と反対が概ね半々となった。このように大学生は、離婚の原因については明確な考えを持っていなかった。
2. 男子は女子に比べると、離婚する人には、親として自覚の欠如と本人の性格的な問題があり、それが原因で離婚すると強く感じていた。

【離婚家庭の子どもに対する考え】

1. 大学生は男女ともに、親が離婚しているということだけで、子どもが問題行動を呈するとは考えていないが、離婚家庭の子どもは心理的負担が多く、気の毒であると感じていた。
2. 男子は女子に比べると、離婚家庭の子どもは親から十分な配慮と世話が受けられないので気の毒であり、反社会的な行動を起こしやすいと認識していた。

【結婚に対する考え】

1. 大学生は男女ともに、結婚を人生の選択肢のひとつとして捉えており、結婚を絶対視していない。そして、結婚しないという生き方も認めている。また、結婚生活は愛情だけではうまくいかず、お金が重要と考え、多少の我慢は必要であるが、夫と妻がそれぞれ人生の目標を持つことも大切であると感じていた。
2. 男子は女子に比べると、結婚に対して保守的な意識が強く、一方、女子は男子に比べると、結婚にはお金と忍耐が必要と認識していた。

【結婚で得るもの・失うものに対する考え】

1. 大学生は男女ともに、結婚によって得るものと失うものの両側面を認識しているものの、結婚に伴う我慢や拘束感の方が強く感じていた。
2. 男子は女子に比べると、結婚すると「家事や育児をしなければならない」、「自由にお金が使えない」、「交際範囲が狭くなる」と強く感じており、結婚に対して負担感、閉塞感が強かった。

【結婚の理由・動機】

1. 大多数の学生が、「愛している人とずっと一緒にいたいので、結婚したい」と回答していたが、その一方で、「結婚については、よくわからない」と回答しており、大学生にとって結婚が目前に迫った出来事ではないため、結婚する理由や動機については明確な考えを持っていなかった。
2. 男子は女子に比べると、結婚すると「寂しくない」と感じていた。また、女子は男子よりも、「結婚しないと、自分の家系が途絶えることが心配」とは考えておらず、男子の方が結婚に関して、家の存続を意識していた。

【離婚・結婚に対する意識の下位側面】

1. 離婚に対する意識は『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚による人間的成長』、『女性の経済的自立による離婚の増加』の5側面から構成されていた。そして、男子は女子に比べると、離婚および離婚家庭に対して抵抗感が強く否定的な意識が高いのに対して、女子は離婚を好意的にとらえ、離婚によるプラスの側面も認識していた。
2. 結婚に対する意識は、『結婚への期待』、『結婚生活に対する拘束感』、『伝統的結婚観』の3側面から構成されていた。そして、男子は女子に比べると、伝統的結婚観を強く、結婚生活に対して拘束感、閉塞感を感じていた。
3. 大学生全体の傾向として、結婚するのは当たり前で生涯独身は好ましくないと考える伝統的結婚観であることや、結婚への期待や憧れが強い学生が、自分の結婚に対する考えや価値観と大きく異なる離婚に対して、否定的な判断をする傾向が認められた。また、結婚するとお金や時間が自由に使えないと感じ結婚生活に拘束感が強い学生も、

そのような忍耐を必要とする結婚生活を解消して離婚する親に対して、否定的なイメージを持っていた。

第3章 成人調査

第1節 調査の実施状況

1. 調査地域と標本抽出方法

(1) 調査地域

東京都 23 区内の 3 区（足立区・杉並区・品川区）（50 地点）。

(2) 調査対象者

30～69 歳の成人男女。

(3) 標本抽出方法

確率比例 2 段抽出（1 地点 20 サンプル）。対象地域内の町丁から人口を基準のウエイトを与え、50 地点を無作為抽出し（第一段階）、各地点の住民台帳から該当年齢者を 20 名ずつ無作為抽出した（第二段階）。

2. 調査方法と期間

(1) 調査方法

無記名の質問紙による郵送調査法。回収率を高めるために、調査票の発送時に謝礼として 500 円の図書券を先付けし、また、コールバックを行った。

コールバックは 2 回行った。14 日後に調査票が返送されてこなかった対象者に対して、葉書で催促を行った（第一回コールバック）。28 日後に調査票が返送されてこなかった対象者に対して、調査票を再送し、回答をお願いした（第二回コールバック）。46 日後に回収を打ち切った。

(2) 調査実施期間

2001 年 10 月 23 日から 12 月 8 日。

(3) 調査実施機関

（株）マーケティング・サービス。

3. 調査数と回収数

(1) 調査数

1000 名。うち 9 名は調査票が未到着。

(2) 有効回収数と未回収数の内訳

回収数は 507 票。このうち回答不備などの 6 票を除き、501 票を有効回答票とした。有効回収率は、50.1%であった。男性 225 名、女性 276 名であった。